

# 『洞谷開山瑩山和尚之法語』

示二妙淨禪師一 攷 (二)

東 隆 眞

## Study on the “Hōgo of Tōkoku (Yōkōji)-founder Keizan-oshō-given to Myōjō” (2)

Azuma Ryūshin

This thesis is a study on the ‘Hōgo’ (dharma-teaching) of Keizanzenji (1268-1325) which was given to his disciple Myōjō. Until now a few scholars studied this ‘Hōgo’. But I think it is necessary to correct and to criticize these studies. My thesis’s contents is as follows: (1) Shōboji-temple where this ‘Hōgo’ was owned and “Shōbogenzō-zatubun” which concluded this ‘Hōgo’ (2) the formation and tradition of this ‘Hōgo’. (3) Association between Keizan-zenji and Myōjō. (4) the organization of contents in this ‘Hōgo’ (5) the citations in this ‘Hōgo’. (6) “Hōgo of Tōkoku (Yōkōji)-founder Keizan-oshō-given to Myōjō” the reprint of this ‘Hōgo’, notes, the modern Japanese translation.

### 目 次

- 六、『洞谷開山瑩山和尚之法語』示二妙淨禪師一本文の復刻、語釈、現代語訳

六、『洞谷開山瑩山和尚之法語』

示<sup>二</sup>妙淨禪師<sup>一</sup> 本文の復刻、語釈、現代

語訳

私の所蔵する複写本、岩手県正法寺蔵『正法眼蔵雜文』所収『洞谷開山瑩山和尚之法語』示<sup>二</sup>妙淨禪師<sup>一</sup>の本文を復刻し、語釈を添え、現代語訳を試みたい。

本文の復刻にあたっては、

〈正法寺蔵〉○洞谷開山瑩山和尚之法語<sup>1</sup>

示<sup>二</sup>妙淨禪師<sup>一</sup>

先日我公ヲ呼フ、公即イフ、擬々ナク滞ナカリキ、必シモ、主ノシルニモヨラ／ス、道ノ私シナキ事、疑フヘキニアラス、此イラウル者ハ、今生ハカリニアラス、無量劫ヨリ以來、具テ更ニ不<sup>レ</sup>變者也、四生六道輪囷生死ノ、凡夫／ト云ワル、モ是也、三世十方ヲ盡シテ、清淨法身ノ、舍那ト現ルモ／是也、水ノ器ニ随テ、圓ナルニモ方ナルニモ有ルカコトシ、水本ヨリ方圓ニアラス、去レハ定マル形相ナシ、如是此一物モ身心ニアラサレハ、頭々物々ニ、／名ナキ事明ケシサレハ、古人モ名ツクル事、不<sup>レ</sup>得ト云ヘリ、又知り不<sup>レ</sup>知トモ、／具足セル事、迷フヘキニアラス、這ノ物アラワレテ、身ト成テ世ニ、人ト喚レテ隠レナキ事、日月ノ、天ニカクレナキカ如シ、更ニ我ト云人、世ニ二人無ナリ、日月ノ光ノ、不<sup>レ</sup>至<sup>ニ</sup>處無カ如シ、眼ニハ見ト成テ、明暗ヲ迷ワ子トモ、ウツサレス、耳ニハ／聞ト成テ、宮商ニカナヘトモ、宮商ウツサレス、鼻ニ有テハ、香ヲカケトモ、臭ニモ／芳シキニモ不<sup>レ</sup>滞<sup>ラ</sup>、舌ニ有テハ、味ヲナムレトモ、耳キニモ、苦ニモムサフラス、口ニ有テハ／詞ト成リ声

一、異体、異字（一例 亘（事） 古（古） 灵（靈） 落（落）等（等） 皈（帰） 也（セ）、行数、字数は、印刷その他の都合上改めざるをえなかった。

一、誤字の類いは、その右横に（ママ）と注記した。

現代語訳にあたっては、出来るだけ意訳を避け、基本的には逐語訳とし、原文に忠実であることを旨とした。

〈現代語訳〉洞谷の開山・瑩山和尚の法語

妙淨禪師に示す

先日、私は、貴方と呼んだ。貴方は、すぐに返事をした。おしはかることもなくとどこおることもなかった。必ずしもご本人が知っているのではない。道に私意のないことを疑うべきではない。この返事をした者は今生ばかりではない。はかり知ることの出来ないほどの遠い昔からこのかたよりそなわっていて全く変りはないものである。四種に分類されるさまざまな生物が地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの世界をめぐって生れたり死んだりする人びとといわれるものも、これである。また、過去、現在、未来と東、西、南、北、四維、上下を尽くして清淨法身の毘盧舍那仏として現われるのも、これである。水が器にしたがつて円くなったり四角になるようなものである。水はもとより円形や角形ではない。だから、もともと一定のすがたかたちはないのである。このように、このものも身体や心ではないから、全てのものに、名前がないことは明らかである。そこで、古人も、名

ト成テ善惡ノ語ヲ出シ、歌ヲウタイ經ヲ讀ミ無量無辺ノ法門ノヲ説百  
千ノ言語ヲ作トモ、盡ル事無ク止事ナシ手ニ取足ニ蹈事、更ニ他ノ力ヲ  
不借ナリ此ノ者ノ、様々ノ振舞ナリ只生ヨリ老ニ至ル迄テ是ノヨリ外  
ニ有物ナシ古エヨリ今ニ及ヒ、今ヨリ後モタヘマシキナリ是ヲ知り覺  
リノヲ開クルヲ佛トト云フ此ヲ不レ知ハ無明ノ酒ニ酔ル衆生ト云ナリ  
知識ニ不レ相ノレハ知ル事ナシ縦イモシサヤアルラント思イ知ル事有  
レトモ師モシサソトユルサノスンハ實成ノ事ヲ難レ知故ニ七佛五十餘  
代之佛祖一代モ師ノ印證ヲ不レ受ノハナシ往昔モ如是今モ如是故ニ  
過去ノ佛モ際限ナシ未來ノ佛モ斷絶セサルナリ、天地ノ先ニ先立テ  
天地ノ後ニ後ナルハ這ノ者ナリト知ルヘシ境ニ引レテ善惡ノ念ヲ起  
ス者業風ニ吹レテ境ノ所ヲ定メサルカ如シ六道ニ流轉シテ蠢々トシ  
テ生死ヲ不レ脱、鎮ナヘニ自由自在ナル事ヲ不レ得ナリ今モ已ニ還テ一切  
ノ思ヲ發サ、レハ一切ノ顛倒ヲ離テ三界ノ際ニ住スル事ナシ縦ヘ  
化度ノ為ノ假ニ生死スレトモ如レ影如レ幻ニテ真ニ有アル事無ナリ此ノ者  
ノ暫ク名ケテ宗旨トス、知ニ二道アリ一ニ萬事ヲ措イテ一切ノ營  
ミヲ止テ心ヲ清マシ事波ナキ水ノ如ク雲ナキ空ノ如クニ成リタル時  
實ニ一切ノ相ヲ離レタルノナリ不互ニシテ成スト云ナリ此ノ処ニ  
安住スルニ今ノ坐禪一行三昧トモノ名ツク七佛ノ妙行祖師ノ要義ナリ  
縱ヘ又不得人モ此法ニ安住スレハ知ニモノ属セス不知ニモ属セスシテ  
已ニ自ラ道者ト成ナリ以後ノ諸佛モ如何ントスルノ事ヲ不レ得無為絶學  
ノ人トナルナリ然レハ悟ト不レ悟ヲ不レ顧證ト不證トヲ思ワス端坐  
シテ動セサル事須弥ノ如クナルヘシ即心成佛ノ直道也ノ諸佛ノ心印也  
佛祖ノ密受也故ニ名ツケテ大安樂ノ法門トス、是ヲ非思量ノ修行ト

づけることは出来ないと言っているのである。また、知っていても知  
っていないくても、そなわって足りているのだから、迷うことはない。  
このものがあらわれて身体となつて、世間で人とよばれてはつきりし  
ていること、日や月が天にかくれないようなものである。さらに、  
私という人間は、世間に二人としないのである。日や月の光りの至ら  
ないところがないようなものである。眼では見るといふことで、明と  
暗をまちがえることはないが、在るわけではない。耳では聞くといふ  
ことで、宮、商などの音階にかなうに聞こえるけれども、宮、商な  
どの音階があらわれるのではない。鼻では香りを嗅ぐけれども、臭く  
ても、よいにおいでも、とどこおらない。舌では味をなめるけれども、  
甘いのも苦いのもむさばらない。口では詞となり声となつて、善、惡  
の語を出し、歌をうたい經を読み、数かぎりない教えを説き、百千の  
言語を作るけれども、尽きることがなく止むこともない。手に取り足  
に踏むことにおいて、さらに他の力を借りることはない。このものの  
さまざまなふるまいである。このものは、ただ生まれて老いに至るま  
で、これよりほかにあるものではない。むかしから今に及び、今より  
のちも絶えることはない。これを知り、覺りを開くのを仏といふ。こ  
れを知らなければ無知の酒に酔う衆生といふのである。よい指導者で  
なければ知ることはない。たとえ、もし、そうであるかも知れないと  
思い、知ることにはあつても、師がそうであると許さなければ、真實の  
成就のところは知るのはむずかしい。ゆえに、過去の七仏よりこのか  
た五十余代の仏祖は、一代たりとも師の印証を受けないといふことは  
ない。むかしもそうであつた。いまもそうである。ゆえに過去の仏も

ス、不<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>ハ其ノ心ヲ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得ナリ浩波<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>入者<sup>16</sup>ロウテウノハウニ  
暗ラカランカ如シニ<sup>ニ</sup>行住坐臥ノ間、凡ソ一切ノ作業ノ時打置処ナ  
クノ不<sup>レ</sup>借<sup>サシ</sup>カ忘ル、事ナク不<sup>レ</sup>思量ノ所ヲ思量シ、無知覺ノ処ヲサトラ  
ス、謂<sup>ユル</sup>所上ノ天地未<sup>レ</sup>分身心未<sup>レ</sup>萌<sup>キ</sup>上下四維無<sup>レ</sup>等匹東西不<sup>レ</sup>弁南北不<sup>レ</sup>分  
時ノ節トフス者未<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>地<sup>ニ</sup>、時節夢見テ眼コ未<sup>レ</sup>發聞乃至箭ノ絃ヲ離  
ル、ノホト及ヒ箭ノ的<sup>ニ</sup>中ル時節<sup>ニ</sup>至テ迄テ心ヲ着<sup>テ</sup>思量スルヲ一切ニ  
工夫ノヲ捨テ去ト名ク如<sup>レ</sup>是不<sup>レ</sup>措時必ス此造作ナク不知ナク名状無キ  
処<sup>ニ</sup>相ノ應セルナリ一念相應ノ時節ト名ツク佛モ不<sup>レ</sup>到衆生モ不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>  
到道ト名クノ然者、閃電光擊石火ノ眼<sup>ニ</sup>遮ル時モ、心ヲ付ヘシ裏<sup>コ</sup>々々  
ル雷声耳<sup>ニ</sup>塞<sup>フ</sup>ルノ時モ心ヲ付ヘシ乃至人ノ呼フ時ヲホヘスシテ販去ル、  
足<sup>ニ</sup>物ヲ蹈フム時疾<sup>ニ</sup>通ノ身<sup>ニ</sup>トアル時<sup>ニ</sup>モ心<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>捨不<sup>レ</sup>忘云事ナシ乗<sup>レ</sup>  
馬モノ馬ヨリ落チ渡<sup>レ</sup>橋者ノ橋ノヨリ落時節知盡情忘ト如<sup>レ</sup>是縁ヨリ入  
ル事アリ昔ノ香嚴靈雲ニモ不<sup>レ</sup>別ノ不<sup>レ</sup>劣<sup>ヲ</sup>ヘキナリ此ノリヤウ道ノ参学  
皆是他ノ力ヲ不<sup>レ</sup>借自心ノ精進<sup>ニ</sup>依テ云ノヘトモ同ク師ノ印證ヲ受サレ  
ハ縦ヘ所解佛祖ノ如クナリトモ只自然外道ノノ類イナルヘシ人天ノ師  
範トスルニ不<sup>レ</sup>足故<sup>ニ</sup>達磨大師ノ正智モ若是般<sup>ニ</sup>若多<sup>21</sup>ノ羅ヲ為<sup>レ</sup>師不<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>  
勅命曾来<sup>レ</sup>震旦<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>名匠難<sup>レ</sup>救<sup>レ</sup>迷徒<sup>ヲ</sup>雖然殊ナル營<sup>ニ</sup>ミナシノ九年面壁  
セシノミナリ其ヨリ以来<sup>22</sup>五家七宗ノ宗旨偏<sup>ニ</sup>坐禪三昧ヲノ以<sup>テ</sup>自受用<sup>23</sup>  
ノ修行トセリ学者莫<sup>レ</sup>忘コト<sup>24</sup>曇祖永平和尚云人トシテ意根ヲ裁斷ノセ  
ンカ如キンハ千人ハ千人ナカラ萬人ハ万人ナカラ皆得道スヘシト云ヘ  
リ誰人カ信ノ受奉行セサルヘキ<sup>25</sup>三代ノ法燈ヲ挑ケテ来世ノ蒙昧ヲ  
照ス異ナル義ノ様ナクメツラシキ智恵アラス十餘年但此ノ三昧王三昧<sup>26</sup>  
ニ端坐シテ不<sup>レ</sup>思<sup>27</sup>ノ儀解脫ノ法門ヲ開演ス、他一切衆生ノ安穩<sup>ス</sup>ヲ、扇開

際限がなく多いし、未来の仏も断絶することはないのである。天地が  
出来るまえに先立ち、天地がなくなつてしまつたおわりのおわりは、  
このものだと知るべきである。環境に影響されて善惡の思ひをおこす  
者は、身体、言語、思想の行為に引きまわされて、環境において適切  
な場所を定めることが出来ないようなものである。苦しみ悩みの六道  
に流転し動き乱れて、生死の苦惱を脱出出来ない。今も自分に還つて  
一切の思ひを發こさなければ、一切のさかさまなことを離れて三界と  
いう苦しみ悩みの世界のほとりにとどまることもないのである。たと  
え、教化し済度するために、かりに生れて死んでも、それは影のよう  
な幻のようなもので、實在するものではない。このものをしばらく名  
づけて宗旨とするのである。

知に二つの道がある。一には、万事をさしおいて一切の営みを止め  
て、心を清ますこと波のない水面のように、雲のない空のようになつ  
た時、實に一切の外にあらわれたすがたかたちを離れるのである。独  
立して完成するといふのである。このところに安住するので、今は坐  
禪一行三昧とも名づける。過去の七仏の妙なる修行であり、祖師の重  
要な宗義である。たとえ、また、体得出来ない人も、このところに安  
住すれば、知にも属さず、不知にも属さず、すでにみずから仏道修行  
者となつて、以後の諸仏もどうすることも出来ない無為絶学の人とな  
るのである。だから、悟と不悟とをかえりみることなく、証と不証と  
を考えないで、端坐して動かないこと、須弥山のようにならなければ  
ならない。即心成仏のまっすぐな道である。諸仏たちの心のしるしで  
ある。仏祖たちが親密に受けてきたところである。だから、名づけて

大安樂の教えという。これを非思量の修行とする。修行しなければその心を得ることは出来ない。大海に入ったことのない人は、航海に暗いようなものである。

二には、行住坐臥の日常生活において、およそ一切の行為のときのことである。そのままにせず、忘れることなく、不思議のところに思量し、無知覚のところに悟らせるようにする。いわゆる天地がまだ分れない、身体と心がまだ芽生えない、上下とか四すみなどの方角が分れないとき、なく、東西をわきまえず、南北を分けない時節、倒れようとする者がまだ地に着かない時節、夢を見ている眼がまだ開かないあいだ、ないし箭が弦を離れるとき及び箭が的にあたる時節に至るまで、心を着けて思量するのを、一切に工夫を捨て去ると名づけるのである。このように気を抜かないとき、必ず造作なく、無自覚なこともなく、名状しがたいところに相應するのである。ここを一念が相應する時節と名づけるのである。仏も到ることなく、衆生も到ることが出来ない道というのである。だから、閃めく電光、石を撃つ火が眼をさえざる時も気をつけないばならない。轟々たる雷の音が耳にふさがる時も気をつけないばならない。ないし、人が呼ぶとき、意識せずに帰り去る、足で物をふんだとき、痛みが全身をめぐるときも、心に捨てず忘れず、言うことはない。馬に乗る者が落馬し、橋を渡る者が橋から落ちるとき、知が尽き情を忘れると。このように縁から入ることがある。むかしの香嚴や靈雲とも別ではない。劣っていないのである。

この二つの方法による参学は、みな、これ、他の力を借りずに自分

の精進によるとは言うものの、おなじく師の印証を受けなければ、たとえその理解するところが仏祖のようであつても、ただ自然外道の類いなのである。人天の師範とするには足りない。ゆえに達磨大師の正智も、もし、これが般若多羅を師として勅命を受けなければ、かつて中国に来て、名匠となつて、迷つてゐる人びとを救うことはむずかしい。だからと言つて、特殊な営みはない。九年、面壁しただけである。それからこのかた、五家七宗の宗旨はひとえに坐禪三昧をもつて自受用の修行としたのである。学ぶ者は忘れてはならぬ。わが曩祖永平道元和尚いわく。「人として意根を截断すれば、千人は千人ながらに、万人は万人ながらに、みな得道するべきである」と言つた。たればとか信受し行い奉らないことがあろうか。予は三代の法燈をかかげて来世の蒙昧をも照らそう。なんら異なる様子もなく、ことさらめずらしい智恵があるのではない。十余年、ただこの三昧の王三昧に端坐して、不思議解脱の教を開演してきた。他の一切の衆生の安心のよりどころを扇のように開くのである。

#### 〈語釈〉

1 洞谷 洞谷山永光寺。石川県羽咋市酒井町。瑩山紹瑾禪師は、正和二年（一二三三）八月、この地に草庵を開創した。

2 法語 禪門において指導者が修行者などに対して仏法を示した文章。その形式は、漢文、和文などといういろいろあるが、いま、この法語は、和漢混淆文である。

3 妙淨禪師 前出（拙文「洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」攷」）参

照。

4 公 前出

5 イラフ 古語で、応答、返事の意。

6 四生 あらゆる生物をその生れ方の形態によつて四種類に分けて説明した。胎生（人間などのように母胎から生れる）。卵生（鳥などのように卵から生れる）。湿生（ぼうふらなどのように湿つたところから生れる）。化生（自然に、あるいは忽然と、あるいは過去の業の力によつてつくり出されるもの。天人や地獄の衆生など）。

7 六道 衆生が業によつて趣く苦悩の六つの世界。地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上。四生の語と並べ用いられる。

8 清淨法身ノ舍那 清淨な法身が清淨法身であるが、その法身とは、すがたかたちを超えた真理そのものの仏のこと。舍那は、毘盧舍那仏の略称で、法身の仏である。

9 宮商 音階の一つ。宮、商、角、徵、羽が五音音階。

10 七仏 釈尊と釈尊以前に出現した六仏。釈尊以前の過去の六仏とは、毘婆尸仏、尸棄仏。毘舍浮仏。拘留孫仏。拘那含牟尼仏。迦葉仏。

11 五十余代之仏祖 瑩山紹瑾禪師は、宗門の伝統によれば、釈迦牟尼仏より（第一祖摩訶迦葉）数えて第五十四代の法燈を繼承していることになる。

12 三界 三つの迷妄の世界。欲界（欲望だけの世界）。色界（欲望はなくつた物質の世界。欲界よりも上の世界）。無色界（物質をも超えて純粹な精神の世界。欲界、色界よりも上の世界）。

13 不回互 そのものの個性の面をいう。

14 一行三昧 この語は「文殊説般若経」、「六祖壇経」、「楞伽師資記」などに説示されているが、ここでは、坐禅を指す。ひたすら坐禅だけに打ちこむ修行を言う。

15 非思量 相対的な観念を超えたところの働き。

16 ロウテウ 前出。

17 不思議 相対的な観念をもたないこと。

18 香巖 香巖智閑（八九八寂）。中国、唐代の禅僧。瀉山靈祐の法嗣。瀉山より父母未生以前の消息を問われて答えることが出来ず、瀉山のもとを離れ、南陽慧忠の遺跡で専心に工夫中、庭掃除のとき小石が竹にあたる音を聞いて大悟したはなしは、「香巖擊竹」として有名である。

19 靈雲 靈雲志勤（生没年不詳）。中国、唐代の禅僧。瀉山靈祐の法嗣。靈雲は過去三十年にわたって修行してきたが、一向に法眼が明らかでなかった。ある時、桃の花が咲いているのを見して大悟したという。「靈雲見桃花」として知られる。

20 達磨大師 菩提達磨（五三六？寂）。西天の第二十八祖、中国の初祖。

21 般若多羅 菩提達磨の師。インド相承第二十七祖。生没年不詳。

22 五家七宗 中国の禅門を宗派に分けた。瀉仰宗。臨済宗（黄竜派、楊岐派）（以上南岳下）。雲門宗。曹洞宗（以上青原下）。

23 自受用三昧 仏祖が単伝してきた最上の妙術をいう。「正法眼蔵」の「辨道話」にくわしい。

24 曩祖 先祖のこと。

25 予 瑩山紹瑾禅師の自称代名詞か。瑩山禅師は、道元、懷奘、義价の三代の法燈を継承する。

26 瑩山紹瑾禅師が、妙浄禅師（滋野信直）にこの法語を与えたと推定される元亨元年（二年頃（二三二））よりさかのぼって「十余年」といえば、永光寺草創の年時、すなわち正和二、三年頃（二三三、一三三四）の一、二年まえ（加賀大乘寺住持時代）を指すか。

27 不思議（マヤ）解脱ノ法門 不可思議解脱法門といい、「維摩経」の語として知られる。相対的分別を超えた思議すべからざる悟りの教え即ち坐禅の法。

靈山會上釋迦尊百万ノ衆ノ前ニシテ、一枝ノ花ヲ拈ス、迦葉破顔微笑<sup>28</sup>シテ／正法ヲ傳テヨリ、西天廿八代菩提達磨ニ至ル達磨大師即航海<sup>29</sup>三歳ノ／艱難ヲ不レ辭、遙ニ中花<sup>30</sup>イタリテ、上乘一真ノ機ヲ接ス、直指人心見性成佛<sup>31</sup>／是ナラサリノ慈悲ナランヤ可レ尊<sup>32</sup>可レ恭、其レ見性成佛トハ、汝等本来其人ナリ／所以者ト何トナレハ心源空豁ニシテ本不<sup>33</sup>迷大機天真ニシテ本不悟迷悟／曾テ掬ナシ識情豈又昇<sup>34</sup>乎此時此ノ処、依テ何物トカセン、不是心不是佛／不是物名付ントシテ又無<sup>35</sup>形、故ニ達磨大師假ニ名付テ見性ト云、又暫呼テ／成佛ト云、此人ヲ知ル時、天ノ覆フモ時□レ地ノ載ルモ時碎ク故ニ云豎ニ極ニ／世ヲ横亘レ十方誠哉、三界ノ中ニ身相ヲ不レ現地獄天堂、イツクンソ便ヲ得ン／如レ是識得セハ許<sup>36</sup>汝ニ味カラサル事ヲ所以者何レハ、汝等是其人ナリト雖モ一／念源ニ迷イヌレハ、紛々忿々トシテ有時ハ惡心不善ノ境心置來生地獄／ノ因ヲ植ヘ少モ怖畏スル心ナシ、又有時ハ善心淨欲ノ中ニ、念ヲ留メ未來ノ天堂ノ因ヲ作シ暫モ捨ル心ナシ、豈不<sup>37</sup>見、永嘉ノ真覺大師云ク住相ノ布施／ハ生天ノ福猶シ向<sup>38</sup>テ虛空ニ如<sup>39</sup>射<sup>40</sup>矢ヲ勢力盡テ矢<sup>41</sup>落<sup>42</sup>來生ノ不如意ヲ招得<sup>43</sup>／善心ニ住スルサヘ尚<sup>44</sup>未來ノ地獄ノ因ヲ成ス、何ニ況ヤ惡心ヲ起サンヲヤ、必定シテ／遍<sup>45</sup>ル、処アルヘカラス可<sup>46</sup>耻<sup>47</sup>々々偶人身ノ機用ヲ受正法傳説ノ正師<sup>48</sup>相<sup>49</sup>／ナカラ是ヲ修シ是ヲ學セスシテニタヒ阿鼻、無間ノ大坑ニ沈淪セン事何不<sup>50</sup>哀乎／不<sup>51</sup>見寒山ノ云ク四時無<sup>52</sup>止<sup>53</sup>息、年去又年來万物有<sup>54</sup>代謝<sup>55</sup>九天<sup>56</sup>亦無<sup>57</sup>摧東／明又西暗花落又花開唯有<sup>58</sup>黃泉ノ客<sup>59</sup>冥々<sup>60</sup>去不<sup>61</sup>回<sup>62</sup>年<sup>63</sup>去<sup>64</sup>來<sup>65</sup>四季自<sup>66</sup>遷變<sup>67</sup>花咲<sup>68</sup>葉落<sup>69</sup>皆其<sup>70</sup>有<sup>71</sup>返可<sup>72</sup>悲無間ニ沈淪シテ永劫ニモ不<sup>73</sup>返<sup>74</sup>是<sup>75</sup>寒<sup>76</sup>／山子ノミ如<sup>77</sup>此云ニアラス既是佛世尊說玉フ、一度人身ヲ失ツレハ、万劫ニモ不<sup>78</sup>

靈鷲山の法会で、釈迦尊は、百万人の衆生を前にして一枝の花を高くかかげた。迦葉はにつこり微笑して正法を伝えてから西天インドでは二十八代の菩提達磨に至った。

達磨大師は、航海三年の艱難をもとせず、はるかに中国に至ってもつともすぐれたひとりの真実の人物を接化しえた。直きに人の心を指して、その心性をあきらかにして仏と成った。これはなおざりの慈悲ではない。尊ぶべく恭うべきである。また、見性成仏とは、諸君の本来の人である。なぜかといえば、心の本源はひろびろとしていて、もともと迷わない。すぐれた人物は、天真であつて、もともと悟らない。迷いといい悟りというのは、根拠がないのである。知識、感情もまた際限もない。このとき、ここで、なにものとするばよいのか。不是心、不是仏、不是物、名づけようとしても、また形がない。ゆえに、達磨大師は、かりに名づけて見性といい、またしばらく呼んで成仏という。この人を知るとき、天が覆うの時に□れ、地が載せるの時に碎く。ゆえに豎には三世を極め、横には十方にわたるといふ。まことに、三界のなかに身体のがたかたちをあらわさなければ、地獄や天堂がどうして機会を得よう。このように受けとめるならば、あなたに許す、暗くはないということ。そのわけはなぜかといえば、諸君はその人であるといえども、一念でもその源に迷つてしまうと、紛々、忽々として、ある時は惡心、不善の境に心を置いて、來生に地獄の原因を植え、少しも怖畏する心がないのである。また、ある時は、善心、淨欲のなかに、念をとどめ、未來の天堂の原因を作り、しばらくも捨てる心がないのである。

飯／是又實誠ノ金言ナリ、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑、汝等只今生<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>了者又何<sub>レ</sub>時<sub>ニ</sub>カ  
待<sub>テ</sub>真<sub>ヲ</sub>一大事／因縁ヲ明メン、此事モシ明メント思ワ、自受用三昧  
シクヘカラス、自受用三昧<sub>ト</sub>者<sub>ハ</sub>坐禪ナリ、坐禪セント修学スル人先  
ツ地盤ヲ堅固ナラシムヘシ、地盤堅固ト者ハ、生死事大無常迅速ノ理  
ヲ心底ニ堅ク含<sub>テ</sub>暫モ不<sub>レ</sub>措<sub>ク</sub>、無常ヲ觀スルト云ヘルハ、只出息入息  
ヲ不<sub>レ</sub>待シテ、落ヤスキハ命葉ナリ、縦ヘ百年ノ齡ヲ保トユウモ僅<sub>ニ</sub>／三  
万日ニハ不<sub>レ</sub>過ナリ何況ヤ其中ノ活計ヲヤ、コ、ニ心ヲ付ル時、名利永  
ク盡キ恩ノ愛忽<sub>ニ</sub>空<sub>シ</sub>金銀錢帛ノ寶モ貯ルニモナシ妻子親屬モ  
長<sub>ト</sub>親<sub>ニ</sub>アラス、如是<sub>レ</sub>觀<sub>／</sub>シテ閑床<sub>ニ</sub>潜<sub>カニ</sub>至テ、破蒲團ノ上ニ端坐スル時、  
身心共ニ脱落ス、何物カ你ヲ障ヘヤ一切善惡都莫思量ナレハ處々自  
親シ、若又一塵<sub>モ</sub>一法<sub>モ</sub>捨不<sub>レ</sub>得<sub>／</sub>事アラハ縦不思議ト思量シ、不思議  
ト趣向ストモ、心定メテ有所得ノ中<sub>ニ</sub>有テ豈無為ノ三昧ニ親シカラン  
ヤ／  
昔六祖慧能大師五祖黃梅ノ會曾<sub>ニ</sub>投シテ夜半<sub>ニ</sub>心印ヲ印證セラレ、同  
ク／金襴衣ヲ傳授シテ、大庾嶺ヲ三更<sub>ニ</sub>渡ル五祖六祖ノ跡ヲ指テ云ク  
吾法終ルヌ／其後黃梅首座神秀道明上座ヲツカワシテ、衣鉢ヲ奪取ント  
ス大磐石ノ如<sub>／</sub>シテ拳ルコト不<sub>レ</sub>得、道明懺悔シテ云ク我來<sub>ルコト</sub>為<sub>レ</sub>佛法<sub>ノ</sub>  
為<sub>レ</sub>衣鉢不<sub>レ</sub>來但願ハ行ノ者為<sub>レ</sub>吾開示シ玉ヘ六祖石上ニ坐シテ直下<sub>ニ</sub>  
説<sub>レ</sub>法云ク不思議不思議／正當恁麼時明上座之父母未生以前本來面目  
我還來<sub>レ</sub>、明上座ノ云ク、如何是如何是蜜祖<sub>云々</sub>若先云力如クナラ  
ハ蜜<sub>ハ</sub>汝力邊<sub>ニ</sub>有リ／明上坐豁然<sub>トシテ</sub>大悟<sub>ヲ</sub>作シテ云ク我三十年黃  
梅ノ會裏<sub>ニ</sub>有テ<sub>／</sub>工夫ヲ用フ今日眼病ノ汗ヲ得ルカ如シ真<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>不思  
善不思惡ノ時本來ノ面目アラワレ來ル事ヲ／

見たことがあるはずだろう。永嘉の真覺大師いわく。「住相の布施  
は、生天の福、猶し虚空に向いて矢を射ることがごとし。勢力尽き矢  
歸つて落つ。來生の不如意を招き得たり」。善心で生きるのさえ、なお  
未來の地獄の原因と成る。まして惡心をおこすときにおいては、絶對  
にのがれられるところはあるはずがない。恥ずかしいことだ。恥ずか  
しいことだ。たまたまた人の身としての働きをうけて、正法を伝え説  
く正師に会いながら、これを修めずこれを学ばずして、ふたたび最惡  
の無間地獄の大穴に沈んでしまうことは、なんと哀しいことではない  
か。見ただろう。寒山は言っている。「四時止息なし、年去りまた年來  
り、万物代謝するあり、九天亦摧なし、東は明るくまた西は暗し、花  
落ちまた花開く、ただ黃泉の客のみあつて、冥冥として回らず。」年は  
去り來りて、四季はおのずから遷り變り、花は咲き葉は落ちるように、  
みな、その歸るところがある。悲しむべきことである、無間地獄に沈  
んで永遠に歸るところがないことを。これは寒山子だけがこのように  
言っているのではない。すでに、仏世尊が説き玉うているところであ  
る。「ひとたび人身を失えば、永遠にわたつて歸するところがない」。  
これ、また、まことの金言である。疑つてはならない。諸君がただい  
ま解決しなければ、また、いずれの時まで眞實を待つというのか。一  
大事の因縁を明らかにする、このことをもし明らかにしようと思ふな  
らば、自受用三昧にかなうものはない。自受用三昧とは、これは坐禪  
である。坐禪を修学する人は、まず地盤を堅固にしなければならぬ。  
地盤を堅固にするということは、生死の事は重大である無常は迅速で  
あるという道理を心底に堅く含んで、しばらくもそのままに放置して

はならない。無常を観ずるといふのは、ただ出る息、入る息を待つことなく、落ちやすいのは人命である、たとえ百年のよわいを保つと言つても、わずか三万日を過ぎるといふことはない。いわんや、そのなかでの生活がどれほどのものであろうか。ここに氣をつけてみると、名譽や利欲は永遠に尽きてしまい、恩愛すらたちまちに空しく、金銀錢帛の宝も、貯える必要すらない。妻子や親族も、とこしなえに生きていくわけのものではない。このように觀察して坐禪を行う床にひそかに坐つて、破れ蒲団のうえに端坐するとき、身心ともに迷妄から脱落するのである。なにものがあなたを邪魔すると言ふのだらう。一切の善惡などの思量はないのであるから、ありとあらゆるところにおいて、おのずから親しいのである。もし、また、一つの迷いも一つのものも捨てられないのであるならば、たとえ不思議な思量し、惡を思わないところにかけても、心は功利的な代償を求めるなかにあるわけ、どうして無為の三昧に親密であるなどということがあろうか。

むかし、六祖慧能大師は五祖黄梅のもとに身を投じて、夜半に心印を印証され、おなじく金襴衣を伝授されて、大庾嶺を真夜中に渡った。五祖は六祖の跡を指していわく、「わが法は終つた」。また、そのち黄梅の首座神秀は道明上座を派遣して、衣鉢を奪い取ろうとした。磐石のようであつたので挙げることは出来なかつた。道明は懺悔して言つた。「私が来たのは仏法の為です。衣鉢のためにやつて来たのではありません。ただ願わくは、行者よ、私のために開示して下さい」。六祖は石の上に坐して、ただちに法を説いて言つた。「善を思わず、惡を思わない、まさに、この時が明上座の父母からまだ生まれないうまの

来の面目である。私のところに持つて来なさい」。明上座いわく。「なにが、それですか。なにが親密の教えですか。六祖いわく。もし、先きに言つたようなことであるならば、親密の教えはお前のそばにある」。明上座は、豁然として大悟して、礼拝していわく。「私は三十年間、黄梅の指導のもとにあつて、ゆがんだ工夫をしただけだつた。今日、眼の病いであつたのが完治したようなものである。まことに、善を思わず、惡を思わない時、本来の面目があらわれてくることを知りました。」

#### 〈語釈〉

28 靈山會上 インドの靈鷲山で、釈尊は、法華經を説いたが、一般には、その講席のことを指す。ここでは、靈鷲山で、釈尊が大眾に拈花し、摩訶迦葉に付法したことをあらわす。靈山は、靈鷲山の略称、耆闍崛山ともよぶ。

29 釈迦尊 釈尊のこと。

30 迦葉 インドの付法第一祖摩訶迦葉尊者。

31 直指人心見性成佛 直接に人の心を指して、その心が仏に成ることをあらわす。禪の宗旨を標榜する語として知られる。黄檗の『伝心法要』に見える。

32 空豁 からりとして、ひろびろとしている。

33 大機 大乘の法を理解し、体得することが出来るすぐれた能力の人。

34 識情 迷い悩んでいる心の動き。

35 永嘉、真覺(六七五—七二三)。字は明道。浙江省永嘉県の人。六祖慧能に参じ、直ちに印可をうけ、その夜一宿したので、一宿覺ともよぶ。その著「証道歌」は盛んに世に行われる。

36 阿鼻(無間)大坑 阿鼻の *avici* は無間と漢訳し、八大地獄の一つで、間断なく苦を受けるので無間地獄という。最低、最苦の地獄。

37 寒山子 中国、唐代にいたと伝えられる超俗的な詩人の僧。天台山国清寺(浙江省)に拾得とともに住んでいたという。その詩集は有名。

38 一大事因縁 修行の目的。大悟。成仏。

39 生死事大無常迅速 禅の修行においては、生と死の問題ほど大きなことはなく、無常はきわめて迅速であることを深く心にとどめなければならぬ。

40 身心共ニ脱落。身も心もその迷妄を脱落する。只管打坐の作用をあらわす語。

41 思量 思いはかること。相対的分別。

42 六祖慧能大師 インド第三十三祖で、中国第六祖(六三八—七一三)。中国、日本の禅門の歴史的、思想的源頭に立つ、もつとも影響力の強い祖師。六祖大師ともよばれる。南宗禅の祖。

43 五祖 大満弘忍(六〇一—六七四)。慧能の師。第三十二祖、中国第五祖。黄梅(湖北省)の人。その門流を、東山法門という。

44 大庾嶺 江西省、広東省の省境にある山脈。海拔一、二〇〇米あまり。

45 三更 午前零時から二時ごろまで。

46 神秀 七〇六年寂。五祖弘忍の高弟。北宗禅の祖。

曾祖永平開山和尚ノ云ク不思量<sup>47</sup>而<sup>レ</sup>現シ不<sup>レ</sup>回互而<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>此心是思量セサノ  
レハ本分アラワレ相メクラサレハ心源成スルナリ現成底<sup>48</sup>又如何ナル  
ヘキソヤノ不<sup>レ</sup>見ヤ御歌ニ云心トテ人ニ見スヘキ色ソナキ但露霜ノムス  
フ計リソノ露ニシモトハ秋暮<sup>レ</sup>冬来ルトキ露ナラス霜ナラサル者アノ  
リ是ソノツユシモト云又曾祖和尚云ク寒<sup>レ</sup>火獨臥<sup>ニ</sup>虛堂<sup>ニ</sup>冷<sup>ニ</sup>夜無<sup>レ</sup>  
燈空<sup>ニ</sup>坐<sup>ニ</sup>明窓<sup>ニ</sup>縦<sup>ヘ</sup>一知半解ナシトモ絶学無<sup>レ</sup>為ノ閑道人ナランノ一知  
半解ナクシテ坐スル即其人ナリ、又倩<sup>ツ</sup>古ヲ思イ今ヲ思<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>隣ノ如<sup>レ</sup>  
斯ノ人等或俗典孔老ノ教虚無一片ノ所<sup>ニ</sup>留<sup>リ</sup>或ハ十二本ノ經ノ論<sup>ニ</sup>目  
ヲ曝シ江海ノ沙ヲ筭ヘ依文傳義ノ類イト成リ或又觀念觀<sup>50</sup>ノ定心ヲ凝  
ラシ念ヲ澄シ、口ヲ閉目ヲ塞キ、坦然トシテ不動、是何故ノ如<sup>レ</sup>是類皆  
是真ノ道ニアラス、<sup>52</sup>十地聖人ノ說法、雲ノ如ク雨ノ如シノ猶佛ノ見性ハ  
羅穀ヲ隔ルカ如ク又不<sup>レ</sup>見阿難當年廿年佛侍ノ者タリ一代ノ說教悉ク  
能持テ末代ノ今ニ流傳セリ佛法若教法ノ中ニ有<sup>ラ</sup>ハ阿難先ツ會スヘ  
シ佛既入涅槃ノ後阿難問<sup>レ</sup>迦葉云世ノ尊傳<sup>レ</sup>金襴衣ヲヨリ外別傳<sup>レ</sup>何者ヲ  
迦葉呼<sup>レ</sup>阿難<sup>ヲ</sup>々々應諾ス迦葉ノ云ノ門前ノ刹竿ヲ倒却着セヨ阿難豁  
然<sup>ト</sup>大悟爰以迦葉ノ付法ノオ子ト成ル豈以教法中ニ有<sup>レ</sup>佛法乎阿難  
ハ嗣<sup>ニ</sup>法於迦葉ニ成<sup>レ</sup>オ子ト明ケシノ正法悟<sup>ル</sup>心<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>曾教意ノ中ニアラ  
ス更ニ可疑乎其後一千二百餘歲唐肅宗上元二年自<sup>54</sup>西天大耳三藏云  
自<sup>55</sup>來<sup>ニ</sup>南陽ノ忠國師ノ他ニ向テ三度問フ老僧即今什麼処ニカ在ル  
オ三度<sup>ニ</sup>至テ三藏忙<sup>ニ</sup>然トシテ國師ノ所在ヲ不<sup>レ</sup>知國師呼云這野狐精他  
心通何処ニカアル阿ノ難當年既不<sup>レ</sup>知三藏亦不<sup>レ</sup>得何況末代ニライテヲ  
ヤ教師論師之間ノ誰人カ得<sup>レ</sup>佛意若又是ヲ知得スト云ハ、佛法ヲ謗ス  
ルナラン、可<sup>レ</sup>畏々々ノ

曾祖の永平開山和尚いわく。「不思量にして現われ、不回互にして成る」。この趣旨は、思量しなければ本分があらわれ、あいぐらなければ心源は成るというのである。現成とは、また、どのようなことであろうか。見たことがないか。御歌に、「心とて人に見すへき色そなき 但露霜のむすふ計りそ」。露霜とは、秋が暮れ、冬がおとずれるとき、露ではなく、霜ではないものがある。これを、その露霜というのである。また、曾祖和尚いわく。「寒炉、火無く、独り虚堂に臥す。冷夜、燈無く、むなしく明窓に坐す。」たとえ、一知半解であつても、すでに学ぶものがなくなり為すことのなくなった閑な道人ということになろう。一知半解なくて、坐禪するその人である。また、つらつらむかしを思い、今を思うに、あわれむべきはこのような人たち、あるいは俗の典籍、孔子、老子の教え、虚無一片のところにとどまり、あるいは十二部の經論に目をうばわれ、江海の砂をいたずらに数え、文章をたよりにして仏の意義を伝える類いとなり、あるいは觀念、觀定に心を凝らし、念を澄まし、口を閉じ、目をふさいで坦然として動かない。これは、なにゆえか。このような類いは、みな、これ、真の道ではない。十地の聖人の說法は、雲のごとく雨のごとくである。なお、仏の見性となると、履きものの上から足のかゆいところを搔くようなものである。また、知らないか。阿難は、そのころ二十年間、仏の侍者であつた。仏の一代の說法はこのごとくよく記憶していたので、末代の今日まで流伝しているのである。仏法がもし教法のなかにあるならば、阿難こそがまず会得しなければならぬ。仏はかつて涅槃に入り給うたのち、阿難は迦葉に問うて言った。「世尊は、金襴の法衣を伝えるほか

不見ヤ永嘉大師云若以妄語誑衆生<sup>タラカサハ自ラ</sup>招<sup>タラカサハ自ラ</sup>拔舌<sup>タラカサハ自ラ</sup>塵沙劫<sup>タラカサハ自ラ</sup>愛ヲ以テ智惠ノ有才ノ人一人モ此宗ニ入ナシ故ニ三祖大師云十方智者皆入此宗ノ又殊可憐類イアリ遙<sup>タラカサハ自ラ</sup>他土ノ往生ヲ願テ心ヲ西方ニ投シテロヲ喧シクノ手足ヲ狂乱ス不<sup>タラカサハ自ラ</sup>見ヤ佛言心求<sup>タラカサハ自ラ</sup>法是謂外道又金剛經云若シ以<sup>タラカサハ自ラ</sup>色ヲ見<sup>タラカサハ自ラ</sup>我<sup>タラカサハ自ラ</sup>以<sup>タラカサハ自ラ</sup>音声ヲ求<sup>タラカサハ自ラ</sup>我<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>人行<sup>タラカサハ自ラ</sup>邪道<sup>タラカサハ自ラ</sup>不<sup>タラカサハ自ラ</sup>能<sup>タラカサハ自ラ</sup>見<sup>タラカサハ自ラ</sup>如來<sup>タラカサハ自ラ</sup>可<sup>タラカサハ自ラ</sup>悲行邪道<sup>タラカサハ自ラ</sup>冥<sup>タラカサハ自ラ</sup>入<sup>タラカサハ自ラ</sup>冥事是佛法ニアラス世法ニアラス凡夫迷妄之<sup>タラカサハ自ラ</sup>心ノ甚シキ事拳テ論スルニ不<sup>タラカサハ自ラ</sup>足近代我此宗門之中遍歷<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ參徒大錯ノ事是多端也或ハ一則之公案ト云テ古德ノ言説ヲ胸次ニ含テ不<sup>タラカサハ自ラ</sup>放捨時々着纏<sup>タラカサハ自ラ</sup>心頭<sup>タラカサハ自ラ</sup>待<sup>タラカサハ自ラ</sup>透徹<sup>タラカサハ自ラ</sup>期<sup>タラカサハ自ラ</sup>アリ可<sup>タラカサハ自ラ</sup>笑待悟為足ノ病ナリ縱<sup>タラカサハ自ラ</sup>經<sup>タラカサハ自ラ</sup>トモ万劫<sup>タラカサハ自ラ</sup>不<sup>タラカサハ自ラ</sup>可<sup>タラカサハ自ラ</sup>得<sup>タラカサハ自ラ</sup>通徹<sup>タラカサハ自ラ</sup>スルコト又或<sup>タラカサハ自ラ</sup>云佛法ハ思量<sup>タラカサハ自ラ</sup>ト度<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ外ニアリ眼ヲ開ケハ早ク差過ス、口ヲ開ケハ既<sup>タラカサハ自ラ</sup>違却<sup>タラカサハ自ラ</sup>云テ枯木石頭ノ如ク、無心ノ所是ナリト云テ万事<sup>タラカサハ自ラ</sup>不<sup>タラカサハ自ラ</sup>受<sup>タラカサハ自ラ</sup>如<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>心機未<sup>タラカサハ自ラ</sup>轉<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>之<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ惣不<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ病ナリ縱<sup>タラカサハ自ラ</sup>へ万劫大定ナリトモ共魂<sup>タラカサハ自ラ</sup>不<sup>タラカサハ自ラ</sup>散底<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ死人落<sup>タラカサハ自ラ</sup>空忘外道ノナリ天是天地<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>地山<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>山水<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>水<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>法<sup>タラカサハ自ラ</sup>々自<sup>タラカサハ自ラ</sup>住<sup>タラカサハ自ラ</sup>住<sup>タラカサハ自ラ</sup>シテ錯<sup>タラカサハ自ラ</sup>所<sup>タラカサハ自ラ</sup>ナシ謂<sup>タラカサハ自ラ</sup>之<sup>タラカサハ自ラ</sup>是法住法位世間相常住<sup>タラカサハ自ラ</sup>ヲノレノ現成ナリ、此何ヲカ修セントテ更<sup>タラカサハ自ラ</sup>坐禪弁<sup>タラカサハ自ラ</sup>道<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ心無<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>尤<sup>タラカサハ自ラ</sup>可<sup>タラカサハ自ラ</sup>憐自然見<sup>タラカサハ自ラ</sup>ノ外道ナリ又或云現成ノ諸法ハ非<sup>タラカサハ自ラ</sup>實<sup>タラカサハ自ラ</sup>今此万ノ象ヲ拂<sup>タラカサハ自ラ</sup>去<sup>タラカサハ自ラ</sup>空々寂々ノ処<sup>タラカサハ自ラ</sup>無形無姿無物アリ是我カ本来ノ心ナリト云フノ可<sup>タラカサハ自ラ</sup>笑<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>汝カ心源ヲ訴ル識禪ナリ所以<sup>タラカサハ自ラ</sup>ニ云<sup>タラカサハ自ラ</sup>玄沙云<sup>タラカサハ自ラ</sup>学道ノ人不<sup>タラカサハ自ラ</sup>知<sup>タラカサハ自ラ</sup>真<sup>タラカサハ自ラ</sup>只<sup>タラカサハ自ラ</sup>為<sup>タラカサハ自ラ</sup>認<sup>タラカサハ自ラ</sup>從前ノ識神<sup>タラカサハ自ラ</sup>無量劫來生死ノ本癡人喚テ作<sup>タラカサハ自ラ</sup>本来人<sup>タラカサハ自ラ</sup>是<sup>タラカサハ自ラ</sup>幾ノ誤<sup>タラカサハ自ラ</sup>リソヤ或又一句ヲ問ヘハ一句ヲ應<sup>タラカサハ自ラ</sup>一句々々但是一句問答共<sup>タラカサハ自ラ</sup>一句ノナルヲ謂フ問ハ在<sup>タラカサハ自ラ</sup>答所<sup>タラカサハ自ラ</sup>答<sup>タラカサハ自ラ</sup>在<sup>タラカサハ自ラ</sup>問所擬儀來<sup>タラカサハ自ラ</sup>容言<sup>タラカサハ自ラ</sup>了是宗旨ノ言句ナリ言了ノ若句ヲトク心遅ケレハ非<sup>タラカサハ自ラ</sup>祖師禪<sup>タラカサハ自ラ</sup>而<sup>タラカサハ自ラ</sup>ヒタスラ言句ヲ覺ヘ嗜テ胸中ニ集<sup>タラカサハ自ラ</sup>以テ是ヲ祖門ノ佛法トス不<sup>タラカサハ自ラ</sup>見<sup>タラカサハ自ラ</sup>ヤ古德ノ云其

に、別に何を伝えましたか」。迦葉は、阿難を呼んだ。阿難は返辭をした。迦葉は言った。「門前に建ててある旗を倒しなさい」。阿難は、豁然として大悟した。ここをもつて迦葉の付法の弟子となつた。どうして教法のなかに仏法があるなどといえようか。阿難は迦葉に仏法を継承した弟子となつたことは明らかである。正しい仏法は心を悟るところにあるのであつて、教えのなかにあるのではなからう。更に疑つてみるべきではないのか。

その後一千二百年あまり、唐の肅宗の上元二年、インドから大耳三藏という人物がやつてきた。自称していわく、「他人の心がほしきままに分かる」。南陽の慧忠国師は彼に対して三度にわたつて質問した。「老僧は、いま、どこにいるか」。三度めに至つて、三藏は茫然として国師のいるところを知らなかつた。国師は呼んで言つた。「このいんちきめ。他人の心をほしいままに知るといふが、いったい、それはどこにあるのだ」。阿難はすでに知らなかつた。三藏もまた会得しなかつた。いわんや末代にいたつてはなおさらそうである。教師、論師のなかで、だれが仏法の真意をえることがあろうか。もし、また、これを知得するなどといえ、仏法を諂することになる。おそるべきことである。おそるべきことである。見なかつたであろうか。永嘉大師いわく。「もし妄語をもつて衆生を誑かさば、みずから拔舌を招くこと塵沙劫ならん」。このために、智慧と才のある人は、一人もこの宗に入らない者はいないのである。ゆえに、三祖大師いわく。「十方の智者、みな、この宗に入る」。また、ことに憐むべき類いの人びとがいる。はるかにかの地の往生を願つて、心を西方に投げかけて、口やかましく、手足を狂

參禪ハ要<sup>レ</sup>安樂<sup>ク</sup>ヲ肚裏<sup>ノ</sup>ノ多許<sup>ノ</sup>有<sup>レ</sup>禪何カセン又祖師云運<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>糞土<sup>ヲ</sup>穢<sup>ニ</sup>汝心田<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>笑自性清淨<sup>ノ</sup>ノ心田好運<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>糞土<sup>一</sup>倩<sup>ツ</sup>以<sup>テ</sup>如<sup>レ</sup>是種種ノ見解ノ人豈<sup>ニ</sup>号<sup>レ</sup>禪宗<sup>一</sup>稱<sup>レ</sup>禪僧<sup>乎</sup>所以者何<sup>レ</sup>、禪ト云ハ是向上ノ宗要、佛祖不傳ノ一着ナリ、僧ト云ハ、是物外ノ消息無為無作ノ渾身ナリ、故<sup>ニ</sup>向上は無為々々是向上、無<sup>ニ</sup>別ナリ<sup>一</sup>若如是ナラハ、不許<sup>ス</sup>汝<sup>ニ</sup>禪僧ナル事許<sup>レ</sup>汝<sup>ニ</sup>此ノ禪宗<sup>一</sup>若又如<sup>レ</sup>以前<sup>ノ</sup>、各々所會ナラハ<sup>一</sup>恰<sup>モ</sup>教法ノ卑拙ナルニモ劣<sup>レ</sup>リ、實<sup>ニ</sup>是不<sup>レ</sup>耻<sup>ヤ</sup>、縱<sup>ヘ</sup>僧ト云トモ、比丘ナリトモ、徒<sup>ナル</sup>男子ナリトモ又女子ナリトモ如是道ヲ會セハ、是長老ナリト云ヘシ、所以者何長老トハ<sup>一</sup>人ノ老大ナルヲ不<sup>レ</sup>言道ノ長シ法ノ老<sup>タル</sup>ヲ長老ト云、不<sup>レ</sup>見ヤ大唐<sup>ニ</sup>憑相公<sup>ト</sup>云ヘル<sup>一</sup>人アリ祖道<sup>ニ</sup>長セリ、大官人ナリ、後<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>頌云公事之餘喜坐禪、少<sup>ニ</sup>身曾<sup>ニ</sup>正<sup>着</sup><sup>一</sup>床眠<sup>一</sup>雖然<sup>モ</sup>現<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>宰官ノ相<sup>一</sup>長老云名四海傳<sup>フ</sup>是俗人タリト雖ヘトモ、祖道ニツイチャウセル故<sup>ニ</sup>、大唐世<sup>ニ</sup>皆此人ヲ長老トイヘリ尤モ可<sup>レ</sup>尊又五百人ノ千人、乃至百人五十人ノ、主席ヲツカサルトモ心源ニ暗ンヲハ何是ヲ稱<sup>レ</sup>是老<sup>ト</sup>若是ヲ長老ト云ハ、山家村里ノ漢富貴有德シテ尚嫌<sup>レ</sup>少年ヲ長老ト云ヘシ上古既<sup>ニ</sup>如此ノ法要ナシ、趙州ノ大叢林ト仰キシモ二十衆<sup>ニ</sup>不滿ナリ<sup>一</sup>汾陽ノ大叢林ト云モ、只五六衆<sup>ニ</sup>スキス、明眼有道ノ衲子ナル故<sup>ニ</sup>、大唐是ノ号<sup>ニ</sup>大叢林<sup>一</sup>佛法ノ昌隆セル故其如是、又楊岐ノ會<sup>ニ</sup>大叢林小叢林<sup>一</sup>談有、縱五百人千人ナリトモ有道ノ人ナクンハ、是小叢林ナリ縱ヘ又一ケノ半ケナリトモ明眼有道ノ人ノ、所在、是大叢林ト可<sup>レ</sup>謂ナリ冀<sup>ク</sup>ワ參禪學ノ道ノ人實義ヲ取テ可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>失<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>德<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>捨<sup>レ</sup>名利不<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>見聞者、無<sup>レ</sup>實解皆是癡人ナリ、昔シ求<sup>ニ</sup>真<sup>一</sup>實ノ道<sup>一</sup>人尋<sup>レ</sup>師訪<sup>レ</sup>道時勇猛志氣ヲ起ス有道ノ知識ヲ尋ヌ、不<sup>レ</sup>見ヤ

乱する。見なかつたろうか。仏いわく。「心の外に法を求む。これを外道という」。また、金剛經にいう。「もし、色をもつて我を見、音声をもつて我を求めば、この人、邪道を行じて、如来を見ることあたわず。」悲しむべきことである、邪道を行じて、冥より冥に入ること。これは仏法ではない。世法ではない。凡夫の迷妄の心のはなはだしいこと、あげて論ずるに足りない。近ごろ、わがこの宗門のなかでも、諸方を遍歴している參學の徒で、大いに誤まっていることが多いのである。あるいは一則の公案と言つて、古徳の言葉や説示を胸中に隠して捨てず、つねに頭のなかにまとわりつかせて、透徹の機会をまわっている。喘うべき待悟為足の病氣である。たとえ永い永い時間を経過したとしても通徹することはない。また、あるいは言う。仏法は思量、卜度のほかにある。眼を開けば、はや時機を失う。口を開けば、すでに違うと言つて、枯木や岩石のように、無心になるのがよいのだと言つて、すべてのことをうけとめようとしな。このような考えを變更しようとしな。これは總不是という病氣である。たとえ永い永い時間にわたつておおいなる禪定のなかにあるうとも、いずれも、魂が散らない死人、空にとらわれた外道である。天は天、地は地、山は山、水は水、これは、それぞれがおのれの位置におさまつて、なんらまちがうことはない。これをいう。「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」と。おのれの現成である。これは、いまさら、なにを修行したらよいかなどと言つて、さらに坐禪、弁道する心のない、これは、もつとも憐れむべき自然見という外道である。また、あるいは言う。現に成っているもろもろの存在は、眞實ではない、いま、この

灌溪志閑禪師至<sup>66</sup>末山ニ々々トハ比丘尼ナリ大愚ノ子ノナリ見解不<sup>67</sup>劣<sup>66</sup>師末山見<sup>72</sup>志閑ノ来<sup>73</sup>問云。广<sup>74</sup>什<sup>75</sup>処<sup>76</sup>ヨリ来<sup>77</sup>師云路口末山云汝何不<sup>78</sup>蓋却<sup>79</sup>来<sup>80</sup>師無<sup>81</sup>語師是ヨリ随テ作<sup>82</sup>資師礼<sup>83</sup>參<sup>84</sup>禪学道ス、閑問テ云、如何是末<sup>85</sup>山々云末山頂<sup>86</sup>不<sup>87</sup>顯、閑云如何是山中<sup>88</sup>主山云男女等<sup>89</sup>相<sup>90</sup>アラス、閑云何變<sup>91</sup>シ不<sup>92</sup>去<sup>93</sup>山云是野狐精<sup>94</sup>アラス、コノ何ヲカ變<sup>95</sup>ン依此信伏<sup>96</sup>シテ、菌頭<sup>97</sup>ヲツトムル事<sup>98</sup>三年閑禪師後出世シテ語<sup>99</sup>衆云吾臨<sup>100</sup>濟<sup>101</sup>命<sup>102</sup>ノ処<sup>103</sup>ニシテ半杓<sup>104</sup>ヲ得、末山嬢<sup>105</sup>ノノ処<sup>106</sup>ニシテ半杓<sup>107</sup>共<sup>108</sup>一枚<sup>109</sup>ツクリテ喫<sup>110</sup>シテ、直至如今飽<sup>111</sup>餉<sup>112</sup>タナリ、今此道<sup>113</sup>ヲ聞テ、昔日ノ跡<sup>114</sup>ヲ慕古スルノミ、而今<sup>115</sup>人適<sup>116</sup>雖<sup>117</sup>作<sup>118</sup>參<sup>119</sup>禪見<sup>120</sup>知識<sup>121</sup>人<sup>122</sup>、不<sup>123</sup>見<sup>124</sup>道<sup>125</sup>、實<sup>126</sup>是真<sup>127</sup>ノ道人<sup>128</sup>、得道之人ナレトモ威勢ナキニハ不<sup>129</sup>參<sup>130</sup>、不<sup>131</sup>問<sup>132</sup>、嗚呼可笑、可<sup>133</sup>恨<sup>134</sup>、眼裏<sup>135</sup>翳<sup>136</sup>ヲ生<sup>137</sup>空花<sup>138</sup>祢<sup>139</sup>乱<sup>140</sup>ル、事<sup>141</sup>ヲ、又<sup>142</sup>マウ<sup>143</sup>ラウ居士<sup>144</sup>陽太<sup>145</sup>年府馬<sup>146</sup>等<sup>147</sup>是皆俗人タリト雖<sup>148</sup>モ大唐人尋<sup>149</sup>師訪道久不<sup>150</sup>參<sup>151</sup>者ナシ、可<sup>152</sup>知其<sup>153</sup>正師<sup>154</sup>ト云ヘルハ、正<sup>155</sup>佛心印<sup>156</sup>ヲ傳授セル、知識<sup>157</sup>參<sup>158</sup>学<sup>159</sup>シ、正師ノ印<sup>160</sup>ヲ受タルヲ真<sup>161</sup>ノ正師ト云ナリ不<sup>162</sup>見<sup>163</sup>田<sup>164</sup>悟禪師ノ云ク威音王已前、無師自悟一法追證シテ<sup>165</sup>千聖途<sup>166</sup>ヲ同ス威音王已後<sup>167</sup>至テ自<sup>168</sup>追卓<sup>169</sup>ノ処<sup>170</sup>有テ直下<sup>171</sup>承當<sup>172</sup>シテ無<sup>173</sup>疑依<sup>174</sup>師<sup>175</sup>決擇<sup>176</sup>シ印<sup>177</sup>可セラレテ法器<sup>178</sup>ヲナサシムヘシ、不<sup>179</sup>熟<sup>180</sup>必<sup>181</sup>魔孽<sup>182</sup>カツテ證<sup>183</sup>ノ印<sup>184</sup>ヲ破スル、此故<sup>185</sup>佛祖<sup>186</sup>アツテヨリ以来資授師傳<sup>187</sup>シテ最<sup>188</sup>モ嗣法<sup>189</sup>ヲ尊重<sup>190</sup>シタマツルナリ、古人既<sup>191</sup>如<sup>192</sup>是ナリ今ノ人師ノ印<sup>193</sup>ヲ受ル事不<sup>194</sup>知資授<sup>195</sup>傳授<sup>196</sup>ノスル事ヲ不<sup>197</sup>知可<sup>198</sup>悲<sup>199</sup>先哲<sup>200</sup>ノ古風<sup>201</sup>忘<sup>202</sup>悉<sup>203</sup>魔孽<sup>204</sup>子ト成ル事ヲ只我慢<sup>205</sup>ヲ捨名利<sup>206</sup>ヲ捨テ、一切皆<sup>207</sup>損<sup>208</sup>シテ悟入<sup>209</sup>ノ処<sup>210</sup>有<sup>211</sup>ン、若然者末山云ク男女<sup>212</sup>等<sup>213</sup>ノ相<sup>214</sup>ニアラス何<sup>215</sup>テカ野狐精<sup>216</sup>トナランヤ畢竟<sup>217</sup>如何是<sup>218</sup>衲僧<sup>219</sup>追脱<sup>220</sup>ノ処<sup>221</sup>泣露<sup>222</sup>千般草吟風<sup>223</sup>一樣松<sup>224</sup>ノ

すべてのもののすがたを拒けて、空空寂寂のところに、形のない、姿のない、物のないものがある、これがわが本来の心であるというが、嗤うべきことで、これはあなたの心源を訴えているだけの識禪である。ゆえに、玄沙いわく。「道を学ぶ人が真実をしないのは、ただ従来よりの識神を認めているためである。遠い過去からの生と死の本源を、おろかな人はよんで本来の人としている」。これなどは、どれほどの大きな誤りといったらよいだろうか。あるいは、また、一句を問えば、一句で応ずる。一句、一句、ただ、この一句、問いと答えはともに一句である。いうところの問いは答えるところにあり、答えは問うところにある。あれこれと思慮を入れないあいだに言いおわるのが、この宗旨の言句である。言いおわって、もし言句を解いたり理解することが遅れば、祖師禪ではない。ところがひたすら言句をおぼえたしなで、胸の中に集めこんで、これを祖門の仏法とする。見たことがないか。古徳いわく。「それ、參禪は安樂を要す。肚裏の多許の禪有るを何かせん」。また、祖師のいわく。「糞土を運入して汝が心田を穢す」。嗤うべきことだ、自性の清浄な心の田に、このんで糞土を運入する。つらつら考えてみるに、このような見解の人びとをどうして禪宗と号し、禪僧と称することが出来ようか。そのわけはとなれば、禪というのは、向上の宗要であり、仏祖不伝のところである。僧というのは、これは世間の涯の消息であり、相対的分別をしないのちがけのことである。だから、向上は相対的分別をしないことであり、相対的分別をしないことは向上であって、二でなく別のものでもないのである。もし、このようでなければ、あなたに禪僧であることを許しはしない。あなた

彼法語見<sup>ニ</sup>本校割<sup>ニ</sup>文明年中<sup>74</sup> 圓錄以來無<sup>75</sup>之愚奉戀先哲之古風／餘  
尋覓云為當庵之常住者也／

于時<sup>76</sup> 永正十二年<sup>乙亥</sup> 入寂以來百九十四年  
八月十五日奉書寫以報謝／

洞谷開山瑩山大和尚大禪師之二百年忌辰者也<sup>77</sup> 佳山比丘壽雲僧良椿謹  
拜書／

に、禪宗であることを許さない。(傍点の個所は、原文といちじるしく異なる現代語訳となっているが、原文の前後の文脈から考えて、このように訳しておいた。)もし、また、さきほどのように、それぞれ理解しているならば、あたかも教法の卑拙なものにも劣るのである。実に、これは恥しいことではないか。たとえ、僧といっても、また比丘であつても、ただ単に男子であつても、また女子であつても、このように道を会得すれば、これは長老であるといわなければならない。なぜかといえば、長老とは、人が老いていることを言うのではない。道に長じ仏法に老<sup>た</sup>けているのを長老という。見たことがないか。大唐に憑相公という人がいた。祖道に長じた大官吏である。のちに頌をつくつていわく。「公事の余、坐禪を喜ぶ、かつて脇を將つて床に到つて眠ることは少し。然りと雖も、宰官の相を現出す、長老の名、四海に伝う。」これは俗人といえども、祖道において長じているから、大唐では世をあげて、みな、この人を長老と言つたのである。もつとも尊ぶべきことである。また、五百人、千人、ないし百人、五十人の主席を司る人となつても、心源に暗いのを、どうして長老となえることが出来ようか。もし、これを長老というのであれば、山家、村里の人で、富貴、有徳で、なお年少の者をうとんずるのを長老といわなければならないが、上古においてすでにこのような法はないのである。趙州の大叢林と仰がれたのも、二十人に満たないのであり、汾陽の大叢林というのも、ただ、五、六人に過ぎない。明眼で有道の僧であるゆえに、大唐ではこれを大叢林という。仏法が昌隆しているがゆえに、それは、このようであるのだ。また、楊岐のもとでは、大叢林、小叢林のはなしがある。たとえ五百人、千人

でも、有道の人がいなければ、これは小叢林である。たとえ、また一人、半人でも、明眼、有道の人のいるところは、これを大叢林といふべきである。冀わくは、禪に参じ、道を学ぶ人は、実義をとつてその徳を失わないようにしなければならない。名誉や利欲を捨てず、見聞を離れない者は、真実の理解がない。みな、これは、おろかな人である。むかし、真実の道を求める人は、師をたずね道をたずねる時、勇猛な志をおこして、すぐれた指導者をたずねたのである。みたことがないか。涇溪志閑禪師が末山にいたつた。末山とは比丘尼である。大愚の弟子である。その見解は師に劣らなかつた。末山は、志閑が来たのを見て、問うていった。「近ごろ、どこからやつて来たのか」。志閑が言う。「路口です」。末山が言う。「あなたは、どうして口に蓋をしてやつてこなかつたのですか」。志閑にはことばがなかつた。志閑は、その後、末山に師事して、師と弟子との礼をなした。禪に参じ道を学んだ。志閑が問うて言う。「末山というのは、どんな山ですか」。末山が言う。「末山の頂きをあらわさない」。志閑が言う。「山の中の主はどんな人ですか」。末山が言う。「男や女などのすがたではない」。志閑が言う。「どうして変らないのですか」。末山が言う。「私は、野狐のばけものではない。なにを変えようというのか」。これによつて信伏して園頭を三年つとめた。志閑禪師は、のちに一か寺の住転となつて、多くの僧に語つて言つた。「私は、臨済おやじのところ、半分の杓をえ、末山嬢のところで、半分の杓をえて、あわせて一つ杓として一ぱい飲みおわつて、それから今日まで満腹である。」いま、このことを聞いて、むかしの跡かたを慕うのみである。今の人は、たまたまあちらこちら

に参ずるとはいうものの、禪においてほんとうの指導者に会うことなく、道を見ることもない。実に、真の道のひと、道をえたひとではあつても、權威がないと参ぜず、問わない。ああ、なんとも嗤うべきことであり、うらむべきことである。眼のなかにかげりが生じ、眼花が乱れ飛ぶことを。また、まうらう居士、陽太年、府馬らは、これ、みな、俗人ではあるけれども、大唐の人であつて、師をたずね道をたずねること久しく参じなかつた者はいないのである。知らなければならぬ、その正師というのは、まさに仏の心印を伝授する師に参じ学んで、正師の印可を受けたのを、真の正師というのである。見たことがないか。円悟禪師が言う。「この世にはじめて出現した仏が出るまゑに、師なくしてみずから悟り、一つの法を超証して千人の聖者たちがそのみちを同じくする。この世にはじめて出現した仏が出たあとに至つて、みずから遙かに高く立つところがあつて、ただちに承当して疑いなく師によつて決擇し、印可されて、仏法を継承する人とするべきである。熟さなければ、必ずわざわいが証印を破壊する。ゆゑに、仏や祖師たちよりこのかた、弟子が授けられ師が伝えて、嗣法を最も尊重しているのである。古人は、すでに、このようであつた。今の人はちは印可を受けることを知らず、弟子が授けられ伝授することを知らないのは悲しむべきことである、先哲の古風を忘れて、ことごとくわざわいとなつてゐることを。ただおのれに対する驕慢なところを捨て、名誉と利欲を捨て、一切みな棄ててこそ、悟りに入ることがあるのである。そうであるからこそ、末山が言うように、男や女などのすがたではない、どうして野狐の化けものとなるであらうか。

結局のところ、どうだ。これが破れごろもを着て修行にはげむ僧の超脱のところである。

露に泣きぬれたさまざまな草 風に口ずさむ一様の松

彼の法語は、この校割帳にあった。文明年中の火災のときから無くなってしまった。私は、先哲の古風を恋うのあまり、これをさがし求めて、当庵が備える公有物とするものである。

時に永正十二年乙亥八月十五日 入寂してから百九十四年 書写したてまつりて報謝とする

洞谷の開山瑩山大和尚大禅師の二百年忌のときである

この山に住んでいる寿雲という僧 良椿 謹んで拝み書く

〈正法寺本〉『洞谷開山瑩和尚之法語示ニ妙浄禅師』全文の現代語訳は、これまで、光地英学編『瑩山禅』第十巻 法語 講解（平成三年 山喜房仏書林刊。訳者大谷哲夫氏）があるだけである。このたびの私の復刻と現代語訳の試みは、出来るだけ原型に沿って正確に復刻原文に忠実であることを意図して基本的に逐語訳を行い、部分的には最少限度の意訳をしたところもある。逐語訳をするとやや意の通じないところが出て来るおそれがあるし、逐語訳とは言っても、原文の語句を現代の日本語におきかえるにあたっては、訳者である私の主観ないし判断、解釈が入ることは当然のことではある。原文は、現代の文章と同じ文体文脈ではない。このたび現代語に移した試みが成功したかどうか、絶対の自信があるわけではないが、読者諸賢におかれては、ともあれ、出来るかぎり原文に忠実たらしめたとした志をおくみとり頂き、過不足の点は、これを補ってご読覧願えればと念じている次第である。ちなみに、このたび、私は、右の現代語訳を試みるにあたって、参考資料の一つとして、先蹤の『洞谷開山瑩和尚之法語』（『瑩山禅』第十巻 法語 講解（平成三年 山喜房仏書林刊）以下『瑩山禅』本と略称す）を一瞥してみた。『瑩山禅』本は、私には、原文に忠実な現代語訳というよりは、かなり多く訳者の主観、判断が添えられた意識的な現代語訳であるとうけとめられた。つまり、原文の通りに現代語訳されていないところがすくぶる多いという点である。この点が、このたびの私の現代語訳の試みと相違するところであらう。

『瑩山禅』本の現代語訳は、率直にいつて、かなり問題が有るように思う。その一例を左に掲げてみよう。

1、仏教語の基礎的知識が誤っているために原本の語を誤解し、誤訳している。

原文に、「境ニ引レテ善悪ノ念ヲ起ス者、業風ニ吹レテ、境ノ所ヲ定メサルカ如シ六道ニ流転シテ蠢タトシテ生死ヲ不レ脱、鎮ナヘニ自由自在ナルヲ不レ得ナリ」の箇所を現代語訳して、「心の認識の動きにつれて善悪の思いを起すものは、身口意の三業によって心の認識の動きを定め得ないようなものである。六道に生まれ変わり（そこに）うごめきのたうちまわって生死の苦悩から逃れることができず、総てにわたって自由自在なる悟道の境地を得ることができないのである」。（傍線は東。以下同じ）としている。ここで、原文の「境」を「心の認識の動き」としている。しかし、「境」を、「心の認識の動き」と判定するのは、誤訳である。「境」は、一般には外界の対象、認識の対象である。「心の認識の動き」は、むしろ識というべきであらう。『仏教語大辞典』（中村元著）では、「境」に①対象、外界の存在。現象。物。事物。外界の事物。感覚と心によって知覚され、眼・耳・鼻・舌・身・意の六機官が感覚作用を起こす対象、すなわち六境のこと。これらは人間の心をけがすので塵（じん）といわれる。②対象。認識の対象。心の認識作用が認識する対象。また価値判断の対象。③五官の対象。五境。また意の対象をも加えて六境とする。④すぐれた智慧の対象としての仏法の理をわきまえること。⑤心の状態。境地。⑥唯識では、対象をその性質から分けて性独影、帯質の三類境とする。⑦世界。客観世界。⑧境界。環境。あたり。（抄出）とある。参考にならう。

2、原文にはないのに、現代語訳にはあることになっていて、訳者の主観、解釈の行き過ぎが見られる。たとえば、原文は、「師是ヨリ随テ作ニ資師礼ヲ参禅学道ス閑問テ云如何是末山云末山頂ヲ不レ顯」とある箇所を現代語訳して「師は帰す言葉が無かったので、（そこではじめ）師資（師と弟子）の礼をなして（末山の下で）参禅学道に励んだのである。（また、その際、次のような問答があったと伝えられる）志閑「末山とはどんな山か（末山とは何者ですか）」末山「末山は山頂を顕さない（迷・悟をことさらにあらわしません）」としている。括弧内は、原文を補ってその意味を（一層鮮明にする役割りをそなえているのは理解されないではないが、それにしても、（また、その際は、次のような問答があったと伝えられる）という一段は、原文にはない。原文にないものは現代語訳でもない方がよい。原文にないものを現代語訳で新しく添えてしまったわけが、添えなければならぬ必然性はどこにもない。

3、さらに、もつとひどい例は、原文にはあるのに、現代語訳ではなくしてしまった例である。たとえば、原文では、「一念源ニ迷イヌレハ紛々念ヲトシテ有時ハ惡心不善ノ境心置来生地獄ノ因ヲ植ヘ少モ怖畏スル心ナシ又有時ハ善心淨欲ノ中ニ念ヲ留メ未來天堂ノ因ヲ作シ暫モ捨ル心ナシ豈不レ見永嘉真覺大師云ク」とあるのを、現代語訳して「一瞬でも（その）根源に迷ってしまえば、心は千々に乱れ、あるときは悪心不善の境をさまよい、心に生き地獄の因縁を植え込み、少しも怖畏する心がないのである（から）。永嘉真覺大師は（後略）」としている。このように、原文の傍線の部分の現代語訳が欠落しているのである。

右は、先きに一言したとおり、一例を指摘したにすぎないが、ともあれ『瑩山禪』本の現代語訳は誤りが多く、決して信頼して読むことが出来ないものである。私は、もちろん『瑩山禪』本の現代語訳を悪しきまに非難するのが目的ではない。ただ『洞谷開山瑩山和尚之法語』の原文が誤解してうけとめられることをおそれるのみである。あえて、この機会に書き添えて、諸者諸賢のご注意を喚起するものである。ご賢察を乞うところである。

#### 〈語釈〉

47 曾祖 祖父の父親。瑩山禪師にとって道元禪師は曾祖にあたる。  
48 現成 現前に成就していることを意味するが、道元禪師によれば、たとえば、山には安住と運歩があるとする（『正法眼藏 山水経』）。この安住と運歩が現成の意味する内容といえよう。

49 十二本ノ経論 十二部経のことか。仏の教示を、形式、内容から十二に分類した。修多羅。祇夜。和伽羅那。伽陀。優陀那。尼陀那。阿波陀那。伊帝目多伽。闍多伽。毘伽略。阿波陀達磨。優婆提舍。要するに、一切経のこと。

50 觀念 仏や法や浄土を心に思うかべ、念ずること。  
51 観定 一般には、四神足すなわち四つの神通力の第四思惟神足言いかえると智慧をもって思惟し觀察することによってえられた瞑想のこととされる。

52 十地 菩薩の五十二位の修行の段階のうち、第四十一位から第五十位までを言う。歡喜地。離垢地。發光地。焰慧地。難勝地。現前地。遠行地。不動地。善慧地。法雲地。菩薩の高い境地。

53 阿難 釈尊の弟子、阿難陀尊者。多聞第一。インド付法第二祖。  
54 肅宗 李亨（七一―七六二）。玄宗の第三子。唐の第七代皇帝。  
55 上元二年 七六一年。

56 大耳三藏 生没年不詳。唐の時、インドから中国に渡来した耳の大きな学僧。西京の光宅寺で、南陽の慧忠国師と他心通に関する問答をしたと伝える。

57 南陽ノ忠国師 慧忠（七七―七五五）。浙江省紹興府の人。六祖慧能の法嗣。四十余年間、山中に在り、即心即仏を説いて一世を風靡した。

58 三祖大師 鑑智僧璨（六〇―六六）。中国第三祖。有名な『信心銘』は、代表的著作とされている。

59 金剛經 くわしくは『金剛般若波羅蜜經』一卷（後秦鳩摩羅什三蔵訳。般若空の不可得の道理を説く。梵本原典のほか、チベット語訳、数種の漢訳がある）。

60 玄沙 長沙景岑（八六―八八）のあやまりか。前出。

61 祖師禪 達磨大師から六祖慧能禪師に伝承される言うところの南宗禪。

62 趙州 中国、唐代の僧・趙州從諗（七七―八九七）。山東省曹州郝郷の人。南泉普願の法嗣。「喫茶去」、「平常心是道」などは趙州にまつわる語。

63 叢林 修行道場のこと。一処に集り静寂をこととする。

64 楊岐 臨済宗楊岐派の祖、楊岐方会(九九二―一〇四九)。江西省宜春県の人。石霜楚円の法嗣。

65 涇溪志閑 中国、唐代、河北省館陶の人。臨済義玄の法嗣。八九五寂。

66 末山 末山了然尼(生没年不詳)。

67 大愚 中国、唐代の人。生没年不詳。臨済義玄の師。歸宗智常(八二七ごろ寂)の法嗣。瑞州(江西省)高安に住んだ。

68 圓頭 修行道場の菜園を管理する役取の僧。

69 臨済 中国における臨済宗の祖、臨済義玄(八六七寂)。山東省南華の人。黄檗希運の法嗣。

70 マウロウ居士 不詳。前出。

71 陽太年 不詳。

72 府馬 不詳。

73 円悟禅師 中国、宋代の僧。臨済宗楊岐派の圓悟克勤(一〇六三―一二三五)。禅門の代表的語録『碧巖録』の成立にかかわりをもつ。

74 校割 校割帳こうかくちやう。寺院で人事交代の時、公私、新旧の品物、備品を区分して、これを記録した帳簿。

75 文明年中 一四六九年四月二八日―一四八七年七月十九日。

76 永正十二年 一五一五年。

77 寿雲僧良椿 前出。